
【 異世界トリップ（仮題 ）】

行之泉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【 異世界トリップ（仮題） 】

【Nコード】

N3917Y

【作者名】

行之泉

【あらすじ】

内容は今何となく流行っているみたいな「異世界トリップ」。女性が主人公。長い話を書いているので、短い話も書きたくて&最近腕が落ちた小説プロットの練習です。軽い感じで読める短編で、三回完結作品を集めたアンソロジーになる予定。

【 2011年11月11日11時11分 】その1（前書き）

破序急で言えば破の部分。物事のはじまり。変る世界。
の予定でしたが、四部構成に変更しました。
起承転結でいきます。今回は起。

【 2011年11月11日11時11分 】その1

1の重なる日には何かが起こる…

「本当に起こるのかな。何か…」

怪奇現象が起これと言われる公園。

公園を一望するジャングルジムに登って、美子は自販機で買ったホットの缶コーヒーをあけた。

晴れてはいるが、吹きすさぶ風は冬の使者であるかのように冷気をまとっており、美子のダウンジャケットの隙間から入りこむ。

すっかり寒くなった公園は、春から秋口までは遊びにくる子供やその親が少しはいるが今日は無人だ。

寒さをしのぐため、温かいコーヒーをひとくち含む。

中央にある時計は11時を僅かに過ぎたところだ。

今日は2011年11月11日。

1の数字が横並びする日と時間。

この日には何かが起こると言われている。

前に不思議な現象が起こったのは2001年の1月1日1時1分だったとか。

不思議な現象には諸説ある。

人が消えたとか。死んだはずの人が現れたとか。

一面が畑だった30年前の風景が僅かの間、この場所から見えたとか。

誰が見たかは判らないが、美子の耳に入る時に知り合いの友人の兄とか姉になっているところを見ると、嘘のようなホントのような

話し。

この微妙な信憑性が実に都市伝説らしいと思う。

半ば冗談で美子はその日起こる何かを目撃しようと思つて公園へ来た。

美子の他には都市伝説の真偽を確認しようと思つていような酔狂な人は誰もいないようだ。

高橋美子は美術大学生油絵科の四年生だ。

実家暮らしで、就職活動中。

内定はまだもらっていない。

本当は卒業課題に本腰を入れたいけれど、これからの事を考えると頭がいっぱいになって手が進まない。

このまま提出せずに卒業出来ないってことになったら、もう一年大学に残れるかなって甘いことも考えている。

けど、ウチの経済力では難しそう。

自分の強い希望で、美大に入学して通わせてくれただけでもラッキーと思わないといけないのだけど、学校を出た後も絵にかかわる仕事をしたいと思つていいる。

でもそれはかなり難しい。

半年前までの時からバイトに入っていたデザイン会社も、不景気の煽りを受け、去年から新卒の正社員は取っていない。

いろいろ考えたら気分が暗くなってきた。

そついう事を考えないためにここに来たというのに…

…絵を描きたいな。

ふと思う。

そう言えば、最後に何かを書いたのは二週間前だ。

落書きすらしていない。

以前は暇さえあれば何かを書いていたのに。

ペンを持っても線の一本も書けない日々が続いている。

…こんなの私じゃない。

…気晴らしでいいから、何か書こう。

思い立ったら、書きたくなった。

ジャングルジムから降りる。

足を地面につけた時、何処からか声が聞えてきた。

『 我的呼びかけに応えし者、異国の絵師よ我が元へ来たれ 』

「何？どこから声がするの」

周囲を見回すと公園の時計が目に入った。

時計の針は11時11分を示している。

…もしかして、これが…

美子の意識がハッキリしていたのはここまでだった。

突然、足が何かに吸い込まれていく。

落下する感覚。

まるで、地面の底が抜けたかのようだ。

それと共に目の前が真っ暗になり、意識は遠くなっていく。

…落ちる。

美子は暗闇の中で目を瞑った。

【 2011年11月11日11時11分 】その2（前書き）

昨日は三部構成と書きましたが、長くなったので四部構成に変えます。

これ以上は変更ありません。今回は起承転結でいきます。

今回は「承」で。

【 2011年11月11日11時11分 】その2

目が覚めた美子の視界に飛び込んできたのは漆黒の長い髪をし、真紅の瞳の男性だった。

慌てて起き上がる。美子は横になっていたのだ。

起きて判ったことだが、狭い部屋の中ベッドが置かれ、美子はそこに寝かされていた。

年齢は判らないが、自分と同じくらいだろうか。

細い顔に鋭い目、鼻筋は真っ直ぐで、全体に彫りの深い顔をしている。

部屋の中は全体に薄暗く、男性の服も黒っぽい。

マキシ丈のワンピースにバスローブをかけたような服の形だけど、布には不思議な光沢がある。

腰には何処かでみたような文様が掘られた太い革のベルトをしている。

体の線が判らない服を着ているのに、男性だと思うのは、人をデッサンしたたまもの。

見えているラインだけでも男性の骨格だと判る。喉仏を確認するまでもない。

そしてその姿は映画で見るファンタジー世界の魔法使いそのもののだった。

「目覚められましたか。異国の絵師よ」

「何その名前：私には高橋美子って名前があるのよ」

「そうでしたか。大変失礼いたしました。タカハシミコ様。私はライナー。ライナールービン。以後ライナーとお呼び下さい。我が呼びかけに応えて下さりありがとうございます」

「何。その呼びかけって」

「呼びかけは呼びかけでございます。記憶にありませんか」

「無いわね」

「そうですか。でもこの場所に來られたという事は、呼びかけに応えたという事です。私は魔道書編纂に必要な絵を書いて下さる、絵師を求めた。そして表れたのがタカハシミコ様です。絵を書ける人材と御見受けいたしますが如何ですか」

「あ…なるほど。そっか判った」

何をどうすれば人が違う世界に行くのか判らないけど、私が呼びかけに応えたという意味は判った。

「私が絵を描きたいって思った時、あなたが絵を描ける人を求めていたって事ね」

「ええ。そうです」

「でも絵を書ける人なんて他の世界の人じゃなくてもいいんじゃない」

「それが…この世界の者が魔方阵を描くと術が発動してしまうのです。今までは文字で説明した書のみでした。私はそれをもっと判り易く専門家以外の人にも読めるように作りたいのです。そしてそのためにはこの世界の者ではない魔力を帯びない者が、魔方阵を描かなければならない。そうでなければ、色々と不都合が生じるのです」

「どういう事？」

ライナーは少し考えて、胸元から象牙のような薄黄色の、厚い紙のような布のような革のようなものを取り出した。

広げるとベッド脇にある台の上から羽ペンを出し、紙のようなものに二重の円の中と外に変な文字や形をバランスよく配置しながら書き込む。

もう少しで円の全てが埋まるという時にペンを上げた。

「あと一つ呪文を書けばこの魔方阵は完成します。見ていて下さい」
迫力のある顔で言われ私は頷いた。

目の前で文様書き込まれていく。

端まで全て書き込まれた時、目の前が光に包まれた。

眩い光に目を閉じようとした…その時。

中央から白い鳥が現れた。

その鳥は翼を広げて羽ばたき、私の前をすり抜けたかと思うと開いた窓から部屋の外へと飛び立っていった。

美子はその姿を呆然と見送った。

「あ…出ていった」

「心配ありません。伝書鳩ですから、すぐ戻ってきます。大掛かりな魔方陣だと声による呪文など必要ですが、単純なものは陣の完成で術が行われます。その中には炎を呼ぶものもありまして…書いたものが消えるだけならまだしも、全てが燃えてしまうと困ってしまいます。未完成のまま図に表して説明で補足することも考えましたが…」

説明が長くなりそうだったから美子は口を挟んだ。

…彼の言うことは判る私にも私の都合がある。

「色々考えた挙句、絵を描いても魔法が発動しない人を呼べばいいって思いついたって訳ね。判ったわ。でも私長居は出来ないの、私の来た世界でも私は他にやらなきゃならない事があって…ごめんね。帰してくれない？」

「それが…言いにくい事ですが。呼びかけに応えた以上、成就するまで帰還は出来ないのです」

帰れないと聞いて困ってしまった。就職活動、今のままじゃヤバイ。

「えー。帰れないってこと！」

「ええ。今は。でもご安心を。この術は呼び出した者の望みが成就すれば、自動的に帰還できる術になっております。即ち」

「仕事が終われば元の世界に戻るってこと」

「ええ。そうです。それに、ここで過ごした時間は向こう側とは関係ありません。ここでの仕事が終われば、着た時間に戻れます。タカハシミコ様は聡い方ですね」

さつきは就職活動のことしか思い浮かばなかったけど、よく考えたら最悪この世界で一生生きていく可能性もあったわけだ。

そうだったら、就職どころじゃない。

こんな場所でどうやって生きていくつてのよ。

だから 元の世界と元の時間に戻れると聞いて、本当にホッとした。

「しょうがないか。それしかないのなら。それで何を書けばいいの」

「話しが早くて良かった。この場所で滞在中のタカハシミコ様の身の安全。衣食住はご心配なく。客人として丁寧に対処することを誓わせて頂きます」

ライナーは美子の手を取ると、屈んで薬指に唇をつける。

「な…何をするのよ…」

慌てて手を引っ込めると、ライナーは不思議そうな顔をした。

「太陽の加護の指に誓いのくちづけをしただけですよ。誓いをした以上、言葉にいられます。タカハシミコ様は安心して仕事をして頂きたい」

何だか元いた世界とはルールが違うようだけど、魔法使いということからは言葉に出したことに縛られるみたいだという事が判った。

…しょうがない。腹をくくるか。

…さつき見た魔法陣の図は難しくなさそうだった。

…問題は全体像を知らずにライナーの求める絵を描かないといけなということ。

「ま。なるようになるか」

美子は自分に言い聞かせるように言った。

【 2011年11月11日11時11分 】 その2（後書き）

長くなる癖が抜けない様子。

次はもう少しスリムな文章でいければイイナ。

【 2011年11月11日11時11分 】その3（前書き）

だんだん文章が多くなってくる。なーぜー？

第三話です。11月11日に更新したかったので、頑張りました。

起承転結の「転」思ったようには進みませんでした。が、ご賞味くださいw

【 2011年11月11日11時11分 】 その3

あれから一週間経った。

ライナーの言うところの魔法陣を描く作業は思ったよりも楽しかった。

全然違う世界なのに言葉が通じることが疑問だったけれど、それが魔法の失敗で他の世界から来たのではなく。

魔法で呼ばれた証拠だと言われた。

その国の言葉がわかるのではなく、言葉を発すると魔法の力でその世界の言葉に変換されるのだという。

その証拠にライナーがしゃべる唇をよく観察すると、しゃべっている口の形と耳に入ってくる音が違っていた。

妙に間がある時もあり、それはまるで外国の映画の吹き替えを見ているよう。

当たり前のことだが、本来は日本語とは違う発音の言葉であるようだった。

作業はライナーに魔方陣を形作るパーツひとつひとつを書いてもらって、美子が指示された場所に書き写す。

読めない変な文字は、形として捕らえて書き写せばいい。

それだけだ。デッサンは得意だったから、逆にこんなに簡単で良いのかと拍子抜けしたくらいだ。

手始めに書いてくれと言われた円だけで、ライナーは感激してくれた。

真ん丸い円を描くことなど朝飯前。ためらうことなく描ける。

「完璧です。私が書くよりも美しい完璧な魔法陣だ。ありがとうございますタカハシミコ様」

「喜んでもらって良かった。それより、その高橋美子様って呼び方止めてくれない？」

「では何と呼べばいいのですか？」

「タカハシミコは、私の家族の名乗る性と、自分自身の名前の二つが合わさったもののなの。あなたをライナーと呼ぶのと同じで私の事はミコでいいわよ。敬称はいらないわ」

「そんな訳には行きません。客人は丁重にもてなすのがこの世界の文化です。ミコ様と呼ぶことで許して頂けますか？」

「そうね…まあいいわ」

その後、ライナーに試し書きでいくつか呪文を抜いた手本を書いてもらった。

意外なことにライナーは図形を描くのが苦手のようだった。

外周の円は迷いのある波打った線で出来ている。

「何で歪んだ線になってしまっの？」

「普段はこんなに小さく円を書くことはないからです」

そう言つて、何もない広い部屋の中央に白い塊で円を描く。

自分を中心にして描くスピードはさつきよりも速い。

あつと言う間に描いてしまう。

「いつもはこんな風に作業場で描くから、小さく書くのは苦手なのです」

ムキになる様子がおかしい。

思ったよりも可愛い性格のようだ。

「なるほどね。じゃあ。作業をはじめましょうか」

幾つかの練習をして、本番に入った。

筆記用具は羽ペンにインク、書くものが羊皮紙…羊の革の表面を加工して滑らかにしたもの…だったので、慣れるのに少し時間がかかった。

けど、色々な技法の練習をしている時にインクをつけて書くガラスペンなどを使った経験もあつたから、全く触つたことのない筆記用具で戸惑うということはなかった。

美子がかかなければならない魔法陣は300個。

一日10個は確実に進んでいるから、30日…約一ヶ月で仕事は

終了することになる。

契約が完了しなければ帰れない魔法だが、この魔法にはもうひとつ契約完了した時に美子に報酬が入るようになっていているらしい。

たったひとつ願いがかなう。

それが報酬だ。

時は止まっているという説明だったけど、この世界で過ごす美子自身には適応されないみたいだった。

時間が立てばお腹も空くし、トイレもいきたくなる。

生理現象は普段と同じ。

美子自身の体の時間も進んでいるようだった。

大学生の美子には一ヶ月余分に生きたとして、向こうの世界とタイムラグが生じる訳はない。

美子自身は就職活動の猶予期間が出来て、ちょっと開放された気分になる。

それから、心配していたトイレはウォシュレットはなかったけど、普通の便座で安心した。

どんな原理で動いているのか判らないけど、普通の水洗だ。

食事はパンとスープと切った野菜や焼いた野菜。

香辛料と塩で味付けした焼いたり煮たりした肉や魚。

どれも美味しかった。

お風呂は寝室の隣にあって、私専用の横長の陶器製のバスタブ。

猫の足がついたもので、入る時には丁度良い湯加減になっている。ベッドのマットはふかふか。

まるでホテル住まいのようだ。

二人で一日部屋にこもっているのに、料理などはどうしているのだろうと思ったら、身の回りの世話は全部魔法で作った小人がやっているという事だった。

歪な丸で作られた、出来損ないのぬいぐるみの団体が部屋を駆け回っているのを見た時には、3Dのクレイアニメかと思った。

けど。現実だった。

いや魔法世界か。

目は大きな黒目で可愛いけれど、全体に歪んでいる。傷跡とか包帯とか似合いそう。

いわゆるキモカワって感じ。

「可愛いけど、ちょっと変じゃない？もうちょっと線の丸みとバランスを考えたら。もっと可愛くなるのに」

「可愛い？彼等は仕事をするために作られた。仕事が出来ればいいでしょう」

素っ気無く返事をされた。どうやらライナーはセンスが無さそうだ。

この日は食事をしながら、話をした。

「私ひとつしか魔法陣書いてないけど、魔道書を一冊作っただけじゃダメじゃないの？印刷とかあるの？」

「印刷？…いいえ。そういう技術はこの世界にはありません。でも原本は一冊あればいい。完成したら仲間と魔法で複製を作る予定です」

「魔法で複製を作るのか。それにしても仲間って？」

「私が魔道書を作る手助けをしてくれる仲間ですよ。今は事情があって会わせることが出来ませんが、みんな会いたがっていると思います。完成の折、元の世界に帰る前に会ってくださいね」

「本を作ってどうするの？」

「魔法学校に行けないものにも魔道書で学ぶ機会が出来ます。そうすれば、高価な代償を払って術を頼まなくてもよくなります。貧しいもの達も世界に満ちるこの力の恩恵を受けることが出来ます」

「貧しい人？そんな人たちがいるの？」

「ええ、そうですよ。生まれの違いで生活が違う。魔法を使う道…魔道は人のためにあると学校では教えているのに、現実はずう。少数の人たちで独占された力になってしまっている。私はそれを無くしたいんです」

「え？なにに。私って人助けしてる？」

「そうならば…と、願っています」

…とても良い人じゃない。

美子は思った。

それからの作業は順調に進んだ。ゴールは目の前だ。

ライナーは生真面目だけど、堅苦しすぎないところが好感が持てた。

作業後半にはライナーと美子は仲良くなり、この生活にも慣れて終わりを迎えるのが何となく寂しく感じるようになっていた。

「明日は最後ですね」

「そうね」

「願いたい事、決めましたか？」

そうだった。契約が終ったら一つだけ願うことが叶う。

もし何でも叶うのならば、一番私を悩ませている就職を願うのがいいのだろうけれど。

私は迷っていた。

いつの間にか帰ること自体を考えないようにしていた。

【 2011年11月11日11時11分 】 その3（後書き）

一応何とか更新。

次の回で最終回です。

【 2011年11月11日11時11分 】 最終回（前書き）

最終回、遅くなってすみません！

やっぱり土日は時間取れないと反省しました。

ちょっと長いですが読んで頂ければ嬉しいです。

【 2011年11月11日11時11分 】 最終回

今日で多分予定していた作業が終る。

ライナーは朝から少し元気がない。そして美子も。

願い事を考えていてあまり眠れなかった。

寝不足だ。

でも作業を始めたらいつともよりも時間がかかったけれど、支障なく進んでいく。

おそらく今日中に予定の枚数は終わるだろう。

これが終わったら、美子は元の世界に帰ることになる。願い事は決めている。

この世界とお別れで、せっかく仲良くなれたライナーとも会えなくなると思うと、なんとなく寂しくて胸が痛んだ。

願い事を考えようと思っていたけど、決まらなかった。

「あと一枚…」

最後の一枚に手をかける。

その時。

荒々しいノックの音が部屋中に響いた。

「まさか…」

ライナーは呟くと、私が魔法陣を書いた羊皮紙の束を抱えて部屋の中央へ行った。

「どうしたの？」

美子の疑問にも答えず、ライナーは中心に羊皮紙を置くと魔法陣を描く。

書いた事があるデザインだから判る、これは他の場所へ物を移動する術。

「何処かへ移動？」

「そうです。取り合えず、追っ手の届かない場所へ移動しましょう」

美子の頭の中で反政府組織や革命という文字が踊った。美子はこの国の事を知らないが、もしかしたら命の危険もありえるのかと考
え、眩暈がしてきた。

「追ってって…もしかして、政府とか？」

「こわごわ言々とライナーは苦笑した。」

「そんな事はありません。法律に違反することはしていませんよ。
でも魔道書を作ることを快く思っていない団体もあります。既得権
益って判ります？」

「元々、あつた権利や利益でしょう」

「そう。そうです。魔法で商売をしていた人たちには、民衆が魔法
が出来るようになるのを快く思わない人達がいいます。その人達が邪
魔をするのですよ。色々と言いがかりをつけて…」

「じゃあ。邪魔しに来るのは確かなのね」

「そうです。もう一枚で終りだというのに…ここまできて、また最
初からなんて。折角ミコ様に沢山魔法陣を描いていただいたのに…」
命の危険が無いと知って、ホッとした。

ライナーは床から物が消えると、魔法陣を消して、新しい魔法陣
を書き始めた。

新しい魔法を発動させようとしている。

その時。

大きな音を立てて何かが崩れる音がした。

そして複数の荒々しい足音が近づいてくる。

「美子様こちらへ来て下さい」

ライナーが叫ぶと同時に人影が美子の後ろに迫っていた。腕を掴
まれ、羽交い絞めにされた。

「ライナー！」

「美子様」

美子はバタバタと暴れたが、押さえつけられ逃れられない。

ライナーは美子の後ろをチラリと見ると、辛そうな顔をした。何
かを諦めた顔をし、小さく口を動かす。

美子の脇から若い男性が二人飛び出し、部屋の中央へと走った。男達が中央に到達する前に、ライナーの足元がユラユラゆれる。その映像はライナー全身へと広がり…

男達がライナーの居た場所へと到達した時に彼の姿は消えていた。ライナーは他の場所へ移動したのだ。美子をこの場に残して。置いてきぼりにあつて、美子は呆然とした。

中央から戻ってきた見知らぬ男は、憤怒の形相で美子の目の前に立ち、何かを言った。

だが、何と言っているのか判らない。

聞いたことのない発音と言葉。

理解が出来ない。

「私どうなってしまうの…」

情けない声を出すと、目の前の男が悔しそうな顔をした。

呼び出した者としか話せない。ライナーはそう言っていた。

だから重要な情報を美子が持つていても漏れることはない。

美子は男に手に縄をかけられて、引っぱられた。どこかに連れていくつというのだろう。

抵抗することは出来ず、美子はなすがままに従った。

…後一枚、魔法陣を書けば帰れたのに。

…変な感傷に捕らわれず書いていたら、今頃とつくに帰れたのに。

後悔しても時間は元に戻れない。

このままライナーが迎えに来ない可能性もあったが、そんな事をする彼ではないと一緒に暮らして判っている。

…多分。私を迎えに来る。

でもそれが危ないと思うのだ。

この場所で待たず他の場所に移動するということは、相応の準備の出来ている場所だということになる。

美子は自分のことよりもライナーの事が気がりだった。

連れて行かれた場所は豪華な屋敷の客間だった。

美子がこの世界で泊まっていた部屋の三倍は広い部屋。

客人をもてなすのは慣れているのか、美子を捕らえた男は不機嫌な顔のまま、生活に必要な物の置き場や場所を身振りで教えた。

乱暴なことは、捕らえられた時と手に縄をかけられた時だけで、丁寧に扱われているのが判る。

ライナーたちを邪魔する暴挙に出ているのに、意外と紳士だった。

捕らわれて三日経つ。

美子は部屋で過ごすことが強制されたが、それ以外はほぼ自由だ。部屋のカーテンや絨毯の文様が珍しくて、デッサンを取りたかったけど、筆記用具を望んだが硬い顔で断られた。

やることがないので、日がな一日ベッドでゴロゴロして過ごす。暇で退屈でつらい。

初めての感覚を美子は新鮮に感じた。

今まで時間に追われることはあっても、時間が余ってしょうがないということとはなかった。

描けないと思うと、描きたくなってくる。

この異世界で経験したことを描きたい。

ライナーを描きたい。

強い。

強すぎる欲求。

こんな純粋に描きたいと望んだことはなかった。

どうにか筆記用具を手に入りたい。

方法はないだろうか。

考えながらベッドの上でゴロリと寝返りを打つ。

うつ伏せから仰向け。

天井を向いた時、見慣れた男性の顔が目に入った。

「きゃ……」

叫び声を上げそうになったところ。口を塞がれる。

目の前の男性は…ライナーだった。笑顔を浮かべている。

「美子様。助けに来ました」

「ライナー。どうやってここに？」

「最初から場所は判っていたのです。入る方法と邪魔されない細工に時間がかかっただけで…さあ、最後の一枚を描いて下さい。これで貴方は元の世界に帰れることが出来ますよ」

言いながらライナーは文字で書かれたライナーの魔道書と羊皮紙とペンを床に広げた。

最後の魔法陣を書きながら気になることを聞いた。

「ライナー達は大丈夫なの？」

「ええ。もうほとんどの複製は出来てます。もし私が捕らわれても作業は中断されません。それに作業はこれで終りですからね。発行してしまえば私達の手からは離れてしまう。誰にも邪魔されません」

「これからどうするの」

「どうと言われても…変らないと思いますよ。今日よりも明日の生活が穏やかで健やかに過ごせればいい。私は自由であるべきものが狭い範囲に限定されていることに不満があったそれだけです。自分の気持ちを通しただけ。それで他の人も笑顔になるなら、こんなに嬉しいことはありません」

この素朴さがライナーだ。

そんな彼だから描きたいと思った。

最後の一枚は邪魔されることなく、すぐに描きあがった。

「終わりましたね」

「そうね。終っちゃった」

「ありがとうございます。契約成就です。願い事は決めましたか？」

今まで決めて無かった。捕らわれてから、そんな事は全く考えなかった。

「早く言っして下さい。私達からのお礼、受け取って下さい」

「それは…」

悩んでいたら、体が内側から振動しはじめた。

何かが自分を呼んでいる。

「体が内側から揺れている」

「貴方の体が元の世界に戻りはじめている証拠です。帰ってから願っても叶わない訳じゃありませんが、魔法の使えるこの世界で魔法をかけた方が確実です」

帰りたくない。咄嗟に思う。

それだけこの世界が好きになっている。

でも、ちよつとした旅行と思って滞在するのと、一生家族にも友達にも会えないのは違う。

「一番したいことを願ってください」

世界が揺れる。

目の前のライナーが笑顔で話すがその像も揺れている。

声も大きくなり小さくなりで聞き辛い。

深く考える余裕は無かったが、「一番したいこと」という言葉に美子は無意識に答えていた。

「ライナー。私は貴方を描きたいわ」

言葉を言い切った直後。

目の前が真っ暗になった。

カランッ。

金属の落ちる音で目が開いた。

足元には缶コーヒーの空き缶が転がっている。

顔を上げると、公園の時計が目に入る。

時計の針は１１時１１分…いや。

目の前で12分になった。

僅か一分の間の出来事。

はじめに美子が思ったのは『描きたい』という事だ。何を優先しても絵を描きたい。

美子は公園を足早に出ると絵筆を取るために家路へと急いだ。

それから、三年。

美子は結局、就職活動を止めた。

夢中になって絵を描き続け、大学は無事卒業できたが就職浪人しかけた。

だが、就職が決まっていなかった同期の誰かから聞いたのか、以前バイトをしたデザイン会社からパートの仕事をして欲しいと持ちかけられた。

経営が上向けば社員の道も考えられると説明された。

その言葉を信じたわけではないけれど、自分に出来ることをやるだけだと思うと気が楽になった。

そして今年。会社の業績がほんの少し持ち直し、ようやく契約社員になった。

全てが寝静まる丑三つ時。

美子はまだ眠らずにいた。明日は休みだ。夜どれくらい起きていてもいい。

最近では美大同期の友人と趣味で定期的に展覧会をしたり、よく出来た作品は大きな作品展に出したりしている。

賞は良くて入賞止まりだけど、止められない。

描きたいものが次々と浮かんできて、作品として消化するのが精一杯だ。

何かために描くのではなくて。
描く事を純粹に楽しんでいる。

「動かないで。ライナー」

「どうですか？」

「そうよ。そうそう…」

椅子に座ったライナーは片手で魔道書を持って、片手を挙げポーズを取らされていた。

「こんな不自然な姿勢でジツとしているなんて」

「あ…手動かさないで。そのまま」

「魔法で私の姿を写したのじゃダメですか」

「だめに決まってるじゃない」

「いつまで。この姿勢でいなければならないのですか」

「私がいいと言うまで」

「そんな…」

そうあれから、時折向こうの世界への通路が開くようになった。

美子が描きたいと強く望んむと一週間も立つところに通路が開く。

美子とライナーの時間の都合がついた時に自然と開く。

時間はおおよそ三時間程度。

はじめて通路が通ってライナーと再会した時は、ライナーも驚いたのか大事な魔道書を自分の足へ落とす失態をした。

美子の願い事はこんな形で叶ったのだ。

【 2011年11月11日11時11分 】

この不思議な魔法は確かにあった。

【 2011年11月11日11時11分 】 最終回（後書き）

短編【 2011年11月11日11時11分 】は、これで終了です。

読んで下さった方々ありがとうございました。

（この題名が目を惹いたのか、11月11日の訪問者が在り得ない数でビビりました。今となってはいい思い出ですw）

内容は軽く書くつもりが、思ったよりもディープになったような…
そんな気がしますが、気のせいですね。きつぱり。

さて、次回は今週中ごろから同じテーマでBLで短編を書こうと思っています。

場所を変えて三回から四回の予定で作ってみます。

BL短編小説が終ったら、来週辺りにまたこの場所で同じテーマの違った話で書きたいです。

とりあえず平日不定期掲載の感じで…

もし気になるようでしたら、また訪問して下さいますと嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3917y/>

【 異世界トリップ（仮題 ）】

2011年11月15日03時19分発行